様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００７６４

研究課題名（和文）典型的な構文指導リストの再編と発話行為との関連付けに関する実証的研究

研究課題名（英文）A Canonical Construction Instruction List Revisited: Speech Acts Allocation

研究代表者
能登原　祥之（Notohara, Yoshiyuki）

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：７０３００６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、汎用英語母語話者話し言葉コーパス（Spoken BNC2014）を利用し、13種の典型的な構文(e.g., Radden & Dirven, 2007）に現れる間接発話行為を132種（van Ek & Trim, 1991）で記述したものである。その記述結果をふまえ、各構文の構文的意味と間接発話行為との関係を頻度別（高頻度・中頻度・低頻度）に３種類で整理していった。その結果、各頻度グループ別に共通と構文特有の間接発話行為を整理することができた。その視点から、認知文法論の視点で構築してきた「構文指導リスト」を言語機能（間接発話行為）の視点で再編するアプローチを２通り提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、最新の汎用話し言葉コーパスの分析結果をふまえ、13種類の典型的な構文に現れる間接発話行為を記述し、典型的な構文の構文的意味と間接発話行為との有機的な関係を探索的に記述した点にある。これまでの文法指導では、形式重視で、教育目標もまず構文の形式と意味に焦点が当てられ指導がなされてきた。現行の学習指導要領によって動き始めた行動志向の英語教育では、行動重視で、教育目標もまず間接発話行為に焦点が当てられ文脈とともに指導される。その際、文法が疎かになりやすい。本研究は、行動重視の行動志向の英語教育においても有機的に構文を指導していくための指導内容を明らかにする研究として位置づけられる。

研究成果の概要（英文）：This study empirically describes indirect speech acts (ISAs) realisation of thirteen canonical constructions (e.g., Radden & Dirven 2007) referring to 132 ISAs categories (van Ek & Trim, 1991) through the Spoken BNC 2014 corpus. It also tries to clarify the relationships between their constructional meanings and ISAs through correspondence analysis in terms of three frequency-based groups. As a result, it was found that ISAs of three most frequent constructions (e.g., the States/SVC construction (be)), five relatively frequent constructions (e.g., the Emotion/SVO construction (like)), and five less frequent constructions (e.g., Caused-motion/SVO (put)) tended to be realised relating to their constructional meanings. Finally, based on common and unique ISAs, two approaches to restructuring cognitive grammar-based canonical construction instruction list and pedagogical grammar instruction are proposed in terms of ISAs.

研究分野：英語教育学、コーパス言語学

キーワード：典型的な構文　間接発話行為　話し言葉コーパス　教育文法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、行動志向 (action-oriented approach) の英語教育が進み、英語の授業でも設定する教育目標が言語形式中心 (e.g., 現在進行形を定着させること) から言語機能中心 (e.g., 状況を描写できること) へと移行してきている (Council of Europe, 2001, 2020)。学習者も言語活動を通して第二言語の「形式と意味」を心的に位置付ける (form-meaning mapping) だけにとどめず、さらに「形式・機能・文脈」の３者の関係にも配慮し心的に位置付ける (form-function-context mapping) 必要があると主張されるようになってきている (e.g., Taguchi & Roever, 2017)。さらに学習者の言語活動を下支えする教育文法 (pedagogical grammar) の分野でも、伝統的な形式重視のアプローチ（品詞や統語規則など言語形式を明示的に解説）だけでなく、機能重視のアプローチ（言語機能を下支えするものとして品詞や統語規則を解説）も模索され始めている (e.g., Collins, 2017) 。しかしながら、この教育文法の記述の根拠となる統語レベルの構文 (constructions) と発話行為 (speech acts)との関係に関する研究はまだ不明な点が多く、特に間接発話行為 (indirect speech acts: ISAs) となると断片的なものに留まっている (e.g., Biber, Johansson, Leech, Conrad, & Finegan, 1999, 2021; Carter & McCarthy, 2006, Carter, McCarthy, & O'Keeffe, 2011)。そこで本研究では、統語レベルの構文と間接発話行為との関係に焦点をあて、最近公開された汎用英語母語話者話し言葉コーパスを通して行った調査をもとに、認知文法の視点から英語教育の指導内容として構築した「典型的な構文指導リスト」を機能重視で再編していくこととした。

2. 研究の目的

まず本研究では、本研究代表者が行った先行研究（能登原, 2014, 2016）をふまえ、典型的な構文と代表的な動詞については BNC1994 Spoken Component と FrameNet の言語データをもとに典型的とされた１３種 (1.States/SVC (*be*), 2.Processes/SVC (*get*), 3.Location/SV (*be*), 4.Object-motion/SVO (*go*), 5.Possession/SVO (*have*), 6.Emotion/SVO (*like*), 7.Perception & Cognition/SVO (*see*), 8.Mental/SVO (*think*), 9.Self-motion/SV (*go*), 10.Action/SVO (*make*), 11.Caused-motion/SVO (*put*), 12.Transfer/SVO (*give*), 13.Communication/SVO (*say*) に注目した。その上で、中学校の英語教科書を通した触れやすさと日本人英語学習者にとっての使いやすさをふまえ、高頻度構文３種、中頻度構文５種、低頻度構文５種、の３グループに構文を大別し、最近公開された汎用話し言葉コーパスを通して英語母語話者の用例を観察しながら、以下３つの調査課題を明らかにすることを目的とした。

(1) 高頻度の典型的な構文３種（States/SVC、Location/SV、Possession/SVO）に現れやすい間接発話行為にどのようなものがあるのか。
(2) 中頻度の典型的な構文５種（Emotion/SVO、Perception & Cognition/SVO、 Mental/SVO、Self-motion/SV、Communication/SVO）に現れやすい間接発話行為にどのようなものがあるのか。
(3) 低頻度の典型的な構文５種（Processes/SVC、Object-motion/SVO、Action/SVO、Caused-motion/SVO、Transfer/SVO）に現れやすい間接発話行為にどのようなものがあるのか。

上記の調査結果をふまえ、構文指導リストを機能重視で再編し、教育的示唆として典型的な構文の指導のあり方を機能重視の視点から提案することとした。

3. 研究の方法

(1) 使用したコーパス

本研究では、最近公開された汎用英語母語話者話し言葉コーパス Spoken BNC 2014 (Love et al., 2017, Love 2020) をデータとして使用した。このコーパスデータは、2012 年から 2016 年に収集

された最近のイギリス英語の汎用話し言葉コーパスで、2017 年に Lancaster 大学の CQPweb Server を通して公開されたデータである。総語数は、約１千万語 (668 名のイギリスの英語母語話者による 11,422,617 words)で、約 20 年前に構築された BNC 1994 Spoken Component と比較できるよう英語母語話者の年齢や出身地域などを配慮し、前回抱えていた問題点を改善しつつよりバランスを考え収集した言語データとなっている (Love et al., 2017; Love, 2020)。このコーパスを選定した理由として、本研究が典型的な構文指導リストを構築した際、各構文の典型性 (canonicity) を BNC 1994 Spoken Component のデータをふまえていることが挙げられる。本研究は一貫してイギリスの英語母語話者話し言葉コーパスの言語データを根拠に進めている。

(2) 研究手法

１３種の典型的な構文に見られる間接発話行為の記述を試みる際、教育的にも配慮され細やかに分類されている Threshold Level (van Ek & Trim, 1991) が整理した６種（下位１３２種）の言語機能リストを用いることとした。調査手順は以下の通り。(1) Spoken BNC 2014 (https://cqpweb.lancs.ac.uk/) の言語データから、検索式（e.g., {be/V}）を使い、各構文の代表的な動詞に関する用例を全て抽出。(2) [show in random order] 機能を通して検索結果をランダムに配列し、上位 1000 の用例から１３種の典型的な構文を同定しそれぞれの頻度を確認。(3) van Ek & Trim (1998) の６種類の言語機能カテゴリー（1. 事実を伝える・求める、2. 感情を表現する・確認する、3. 人や物に～させる、4. 人と交わる、5. 談話の流れを作る、6. 会話を修正する）で分類。(4) van Ek & Trim (1998) の下位１３２種の言語機能リスト（van Ek & Trim, 1998, pp. 27−47）を利用し間接発話行為を同定。その際、たとえば、2.＜感情を表現する＞と解釈する場合、発話効力表示装置 (illocutionary force indicating device: IFID)として *must (have to)* などモダリティ表現を参考に、3.＜人や物に～させる＞と解釈する場合は、*Can (May) I X?* という定型表現など構文内の言語特徴を参考に同定。

4. 研究成果

(1) 高頻度構文の間接発話行為の記述

上記の調査手順に従い、３種の構文と浮かび上がってきた比較的頻度の高い２６種の間接発話行為との関係をコレスポンデンス分析を通して統計的に確認した。調査の結果、両者には Figure 1 のような対応関係があることがわかった（$\chi 2$ (50) = 2358.93, p = 0.00, 次元 1 : 77.00%, 次元 2 : 23.00%, 累積 100.00% , Cramer's V = 0.627, p = 0.00）。この結果と調整頻度の分布を確認しつつ、３種の典型的な構文と関係の深い間接発話行為を整理すると Table 1 にまとめられる。

Figure 1.

高頻度３種の典型的構文と間接発話行為との対応関係 (1000 構文による調整頻度)

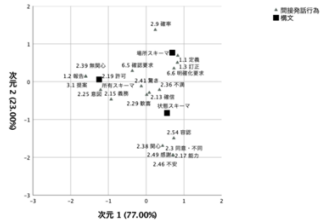

Table 1.

高頻度３種の典型的構文と間接発話行為との対応関係 (上から頻度順)

共通	状態スキーマ (1. States/SVC)	場所スキーマ (3. Location/SV)	所有スキーマ (5. Possession/SVO)
2.11 不満	2.19 容認	1.1 定義	1.2 報告
2.12 歓喜	2.4 同意・不同意要求	1.3 訂正	2.7 義務
2.25 確認要求	2.13 関心	2.5 確率	2.10 意図
2.15 驚き	2.16 不安	6.6 明確化要求	2.9 許可
2.6 確信	2.8 能力、2.17 感謝		2.14 無関心
			2.21 提案

Figure 1 と Table 1 の結果から、(1) States/SVC 構文は＜感情を表現する＞間接発話行為と結びつきやすく、場面により話者の心の機微（容認、同意・不同意、関心、不安、能力、感謝）が込められやすいこと、(2) Location/SV 構文は、（定義）や（訂正）などの間接発話行為とともによく使われ、場面によっては（確率）や（明確化要求）の間接発話行為も入りやすいこと、(3) Possession/SVO 構文は、社会的なやり取りや責任（報告、義務、意図、許可、無関心、提案）に

関わる間接発話行為とともに使われやすいこと、の主に３点が明らかとなった。

(2) 中頻度構文の間接発話行為の記述

次に、前回の調査でも浮かび上がってきた語用論的定型表現 (pragmatic formulaic sequences) とその発話内効力装置 (illocutionary force indicating devices: IFIDs) 機能を持つ言語表現に注目し、より丁寧に間接発話行為を記述することを試みた。調査の結果、コレスポンデンス分析を通して、５種の構文と浮かび上がってきた比較的頻度の高い３１種の間接発話行為との関係を統計的に確認した。その結果、Figure 2 のような関係にあることがわかった（$\chi 2\,(120) = 9845.422, p = 0.00$, 次元１41.90%, 次元２31.20%, 累積 73.20%, Cramer's V = 0.702, p = 0.00）。この結果と調整頻度分布を確認しつつ、３種類の典型的な構文と関係の深い間接発話行為を整理すると Table 2 にまとめられる。

Figure 2.

中頻度５種の典型的構文と間接発話行為との対応関係 (1000 構文による調整頻度)

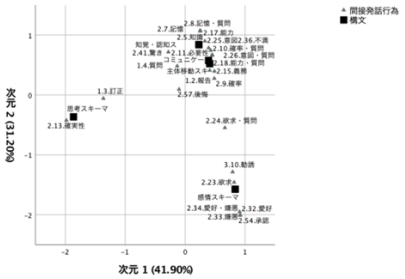

Table 2.

中頻度５種の典型的構文と間接発話行為との対応関係 (上から頻度順)

共通	感情スキーマ (6. Emotion/SVO)	知覚・認知スキーマ (7. Perception & Cognition/SVO)	思考スキーマ (8. Mental/SVO)
1.2 報告 1.3 確認	2.32 愛好	2.7 記憶伝達	2.13 確信
	2.33 嫌悪	2.17 能力	1.3 訂正
	2.23 欲求	2.9 確率	
	2.9 確率	2.25 意図	
	3.10 勧誘	1.3 訂正	
	主体移動スキーマ (9. Self-motion/SV)	コミュニケーションスキーマ (13. Communication/SVO)	
	2.9 確率	2.36 不満	
	2.25 意図		
	2.18 能力		
	2.15 義務		
	1.3 訂正、2.23 欲求		
	3.10 勧誘		

Figure 2 と Table 2 の結果から、(1) ５種の構文に共通して見られる間接発話行為として＜事実を伝える・求める（報告・確認）＞が確認され、ざまざまな内容（感情、知覚・認知、思考、主体移動、コミュニケーション）を報告・確認するためにさまざまな構文が使われること、(2) Emotion/SVO 構文特有の発話行為として＜感情を表現する（愛好・嫌悪・欲求・確率）＞＜人や物に～させる（勧誘）＞、(3) Perception & Cognition/SVO 構文特有の発話行為として＜感情を表現する（記憶伝達・能力・確率・意図））＞＜事実を伝える・求める（訂正）＞と関連があること、(4) Mental/SVO 構文特有の発話行為として＜感情を表現する（確信）＞＜事実を伝える・求める（訂正）＞、(5) Self-motion/SV 構文特有の発話行為として＜感情を表現する（確率・意図・能力・義務・欲求）＞＜事実を伝える・求める（訂正）＞＜人や物に～させる（勧誘）＞、(6) Communication/SVO 構文特有の発話行為として＜感情を表現する（不満）＞ が明らかとなった。

(3) 低頻度構文の間接発話行為の記述

最後に、前回の調査と同様に語用論的定型表現とその発話内効力装置機能を持つ言語表現にも注目し、より丁寧に間接発話行為を記述することを試みた。調査の結果、コレスポンデンス分析を通して、５種の構文と浮かび上がってきた比較的頻度の高い２６種類の間接発話行為との関係を統計的に確認した。その結果、Figure 3 のような関係にあることがわかった ($\chi 2(100) = 4503.742, p = 0.00$, 次元１38.10%,次元２27.00%, 累積 65.1%, Cramer's V = 0.475, p = 0.00)。この結果と調整頻度分布を確認しつつ、３種類の典型的な構文と関係の深い間接発話行為を整理すると Table 3 にまとめられる。

Figure 3.
低頻度５種の典型的構文と間接発話行為との対応関係 (1000 構文による調整頻度)

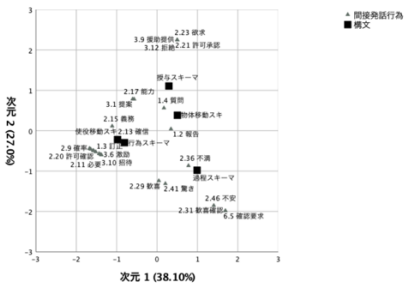

Table 3.
低頻度５種の典型的構文と間接発話行為との対応関係 (上から頻度順)

共通	過程スキーマ (2. Processes/SVC)	物体移動スキーマ (4. Object-motion/SV)	行為スキーマ (10. Action/SVO)
1.1 報告	2.36 不満	1.4 質問	2.13 確信
	2.46 不安		1.4 質問
	6.5 確認		1.3 訂正
			2.25 意図
			2.16 義務
			3.6 激励
			2.17 能力
	使役移動スキーマ (11. Caused-motion/SVO)	授与スキーマ (13. Transfer/SVO)	
	2.25 意図	1.4 質問	
	2.15 義務	2.12 拒絶	
	1.4 質問	2.17 能力	
	2.17 能力	2.13 確信、2.36 不満、3.9 援助提供	
	2.13 確信		

調査の結果、(1) ５種の構文に共通して見られる発話行為として＜事実を伝える・求める（報告）＞が確認され、様々な内容（過程、物体移動、行為、使役移動、授与）を報告するため様々な構文が使われること、(2) Action/SVO、Caused-motion/SVO、Transfer/SVO、Object-motion/SV といった物理的世界・力動的世界を表現する４種の構文の間接発話行為として＜人や物に～させる（激励、援助提供）＞が確認され、人と交流する際にこれらの構文が使われること、(3) 物理的世界を表現する Processes/SVC に見られる間接発話行為として＜感情を表現する（不満、不安）＞が確認され否定的なニュアンスでこの構文が使われること、の３点が明らかとなった。

(4) 結論と今後の課題

認知文法の視点から英語教育の指導内容として構築した「典型的な構文指導リスト」を言語機能（間接発話行為）の視点から再編する際、共通の間接発話行為を軸に複数の典型的な構文をまとめて指導できるよう指導内容を再編し文法指導法を考えていく必要がある。その際、今回の調査結果（Figure 1-3 と Table 1-3）をふまえると少なくとも２つのアプローチが指摘できる。

(1) 高頻度３種の構文（1.States/SVC、3.Location/SV、5.Possession/SVO）の場合、＜不満、歓喜、確認要求、驚き、確信＞の間接発話行為を共通して表現できると考えられる。そこで、さまざまな行動志向のタスクを学習者に促す際、まず学習者も使いやすいと考えられる３種の典型的な構文を通して自分の心の機微を豊かに表現していくように指導していく。

(2) 中頻度構文５種（6.Emotion/SVO、7.Perception & Cognition/SVO、8.Mental/SVO、9.Self-motion/SV、13. Communication/SVO）や低頻度構文５種（2.Processes/SVC、4.Object-motion/SVO、10.Action/SVO, 11.Caused-motion/SVO, 12.Transfer/SVO）の場合、＜報告＞を共通して表現できると考えられる。そこで ＜報告＞という間接発話行為を表現する場面を含む行動志向のタスクを促す際、学習者の各構文への熟達度レベルも確認しつつ、１０種類の典型的な構文を通してさまざまな現実世界を豊かにいろいろな角度から描写していくように指導していく。

今後の課題としては、以下４点が挙げられる。(1) 同じような調査を行った際に同じような結果が得られるか再検証 (replication) が必要であること、(2) 典型的な構文に現れる間接発話行為の同定作業が難しいことから、時制・相・モダリティ（tense-aspect-modality: TAM）など発話効力表示装置（IFID）として機能している言語表現を手がかりにより精緻に両者の関係を確認していくこと、(3) 典型的な構文と間接発話行為との関係を整理する際、コレスポンデンス分析以外の精緻な統計手法も検討し利用していくこと、(4) １３種構文全体の共通項となる間接発話行為があるかについてはあらためて調査していく必要があること。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Yoshiyuki NOTOHARA	４．巻 102
２．論文標題 Type/Token Frequency Effects in L2 Learners' Canonical Construction Development	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Doshisha Studies in English	６．最初と最後の頁 141-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 能登原祥之	４．巻 101
２．論文標題 A Collostructional Approach to Tense, Aspect and Modality Patterns with Canonical Constructions in Spoken English	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Doshisha Studies in English（同志社大学人文学会）	６．最初と最後の頁 127-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 能登原祥之	４．巻 50
２．論文標題 典型的な構文に見られる語用論的定型表現と間接発話行為	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国地区英語教育学会誌（中国地区英語教育学会）	６．最初と最後の頁 51-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 能登原祥之	４．巻 90
２．論文標題 行動志向の英語教育における文法指導	５．発行年 2019年
３．雑誌名 CHART NETWORK（数研出版）2019	６．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 能登原祥之	4．巻 49
2．論文標題 典型的な構文に現れる間接発話行為の解釈	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中国地区英語教育学会研究紀要	6．最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Yoshiyuki NOTOHARA
2．発表標題 Exploring the metaphorical and image-schematic grounding of indirect speech acts realization in processes and force-dynamic schemata constructions: A corpus pragmatics approach
3．学会等名 The 41st International Computer Archive of Modern and Medieval English Heidelberg Digital Conference（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 能登原祥之
2．発表標題 典型的な構文に見られる語用論的定型表現と間接発話行為
3．学会等名 中国地区英語教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 能登原祥之
2．発表標題 典型的な構文に現れる間接発話行為の解釈
3．学会等名 中国地区英語教育学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshiyuki NOTOHARA
２．発表標題 Type frequency effects on L2 learners’ canonical construction development
３．学会等名 The 51st British Association for Applied Linguistics（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoshiyuki NOTOHARA
２．発表標題 A usage-based approach to criterial canonical construction in an L2 learner corpus
３．学会等名 The 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関